江戸表具　笹谷義則

紙・裂・糊を使用して、つくり上げてゆく張り作業です。日頃、日本画や書道などの額装や古い絵を修復する仕事をしております。一言に修復と言っても、作者の描く技法によって様々な技術を駆使しなければなりません。その技術を生かし製作した身近な商品も制作しています。

能面　平岡笑子

能は形の芸術といわれます。所作だけでなく、面のつくりも配置や寸法がこまかく決められています。面だけでも観賞されますが、舞台で演じられるときに、いきいきと演者の感情を表現します。

染色　草薙恵子

染料のもつ染着性を利用して繊維を好みの色や模様に着色します。マーブル（大理石の意）染めは、わが国では黒流し染めと呼ばれ、平安時代より歌集や経典の料紙を飾る古い歴史のある工芸です。西洋では、同一模様が不可能な特質を生かして公文書に染め付けて、本の装丁などに愛用されてきました。

陶芸　林 信弘　/　林 理子

甲和焼は小岩地産の粘土による陶芸製品です。昭和５０年代後半に、地元の粘土を使った作陶に取り組みました。　鉄分が多く耐火性の弱い粘土に各地の粘土を混合させる試みを繰り返し、甲和焼を完成させました。現在は、地元粘土１００％の作品も可能です。

江戸扇子　松井宏

初めはうちわのように一枚の形式であったものが、次第に折りたたみ形式になったといわれています。ヒノキの薄片を綴りあわせたいわゆる桧扇があり、その後鎌倉時代に現在のような紙扇が出来て今日に伝わっています。扇子が完成するまでには３０近い工程が必要です。そのほとんどが長年の経験によって得られた微妙な力加減や判断に支えられた手仕事です。

漆芸　山口敦雄

日本における漆工の歴史は大変古く、数千年前の縄文時代にまで遡ります。貝塚から発掘された、土器や木器に塗られた漆は、数千年を経た現在でも見事な肌を保ち、その耐久性の高さを示しています。現在の漆の技法は、大陸から仏教文化の伝来とともに、シルクロードを経て日本に伝えられたとされています。法隆寺に残る玉虫厨子や、正倉院の唐太刀等からもそれを窺い知ることができます。陶器を英語で「china」というのに対して、漆器は「japan」と呼ばれます。中国から伝えられた漆塗りの技術は、日本で大きく開花し、中国のそれを大きく凌ぐまでになり、世界に通用する、日本を代表する文化にまでなったのです。一時期、プラスチック等の合成樹脂を使った安価なイミテーション漆器製品が大量生産されたことにより、本物の漆器の存在が危ぶまれたこともあります。しかし、現在では化学製品の危険性が叫ばれる中、環境に優しい、天然素材の塗料として漆が再び見直されてきています。

錺金具　一ノ谷禎一

錺（かざり）工芸は神社仏閣などの装飾金物（錺金具）を制作する仕事です。社寺建築物の装飾、襖の引手や長押の釘隠し、破風などの屋根まわりといった日本建築を優美に支えてきた錺金具は、建築全体に荘厳な雰囲気を与える存在です。錺金具は種類も多く、錺屋の仕事内容は多種多様です。紙などで型を取り自分の感性で文様を彫り、形に仕上げていきます。素材は主に銅版です。鏨（たがね）鑢（やすり）金槌（かなづち）などの道具で、伝統的な手法を使い、毛彫り、打出浮彫り及び地彫り、透かし彫りなど、色々な彫り方を駆使します。地金の特性や延縮度合いを見極め、日本古来の伝統的な文様を時代考証し用途にあった作品を制作する、たいへん根気のいる仕事です。

江戸ゆかた　高橋榮一

浴衣は、平安時代に「湯帷子」（ゆかたびら）と称して、風呂に入る時着たものです。江戸時代、柄が染められるようになり、湯上がりの着物になりました。江戸時代より、明治時代まで、藍染め浴衣が全盛で、昼間着としても利用されました。大正になって長板を使わず、折って柄を重ねて形付けし、上より化学染料を流し込む方法（折中染）で染めるようになり、大量生産が可能になりました。

日本刺繍　吉田順子

日本刺繍は、平安時代の貴族文化の中で広がり、鎌倉、室町にその技法が発展し、江戸時代になって能装束や小袖にと華麗に洗練された技法が完成されました。和服のほか、額に仕立てて、着物・帯などのちょっとした染みをかくすためにも利用されます。糸は、絹糸を使い、金糸銀糸をあしらって、太く大胆にも、細く繊細にも自在に作れ、色も豊富でぼかしも表現できます。一針一針根気よく進める手作業です。

江戸紹刺し　渡辺靖子

天平の時代から 1200 年も続く刺繍の一種で、刺し方に大きな特徴があります。和服地の紹とは異なる、専用の紹布の織り目に、垂直に絹糸を刺して、光沢のある図柄、模様を作り上げていきます。明治の初めまでは宮廷や将軍家、各大名家で最高級の手工芸品として親しまれ、「公郷紹ざし」ともいわれていました。近年では、広く庶民にも愛されるようになりました。ひとつの作品が仕上がるまで、一針一針に思いを込めて、時間をかけて作り上げます。

江戸硝子　中村弘子

ガラスの原料は珪砂とソーダ灰です。ルツボの中で１３００℃で熔融し、鋼管で巻き取り、吹いて成形します。色被ガラスという２色のガラスを重ねて吹く技術は、人の手によってのみできるものです。合理的に色を被せる「ポカン製法」は、中金硝子総合（株）初代中村金吾によって考案されました。江戸切子やサンドボラスト彫刻で模様をつけますが、それらの組み合わせで個性的な作品を作り出し、楽しむことができます。

江戸風鈴　篠原公孝

宙吹きによる手づくりのガラス風鈴です。細いガラス管の先に溶けたガラスをすくいとって、息を吹き込みふくらませます。これにさらにガラスをすくい取り、先端まで穴をあけて、風鈴の大きさにふくらませます。　先端の球体を切り落として冷まし、内側から模様を描き、先端に糸を通して短冊をさげます。古くからある夏の風物詩ですが、ガラスでつくられるようになったのは江戸時代のことです。

金工　横塚裕多加

金属工芸の製造方法は、大別すると鋳金・鍛金・彫金があり、鋳金の技術を用いて鉄瓶を中心に各種金工品を製作しています。茶釜や鉄瓶の鋳型製作工程は、50 工程以上あり、一つの鋳型を作るのに、１ケ月ほどかかる場合もあります。数百年続く伝統的な製作技法（挽き型方および焼き型方）にこだわりを持ち製作しています。

組子細工　田中小夜子

組子は、障子や欄間などに用いる建具の一分野です。切り込みを入れた細い板で釘を使わずに手作業で組み合わせ、緻密な紋様を編み出していきます。材料である木の性質を熟知し、わずかな誤差も許されない精巧な技術を伝えています。

日本刺繍　有門良子

日本刺繍は刺繍台に固く張られた布地に、その文様に合うように釜糸を撚ってそれぞれの糸を作り、針を突き通し 42 種類の技法を用いて、糸を繍い締めて文様を表現します。繍の歴史は古く、1600 年前朝鮮半島から渡ってきました。家元制度、流派による事もなく、個人対個人で長い時をかけて技の先達が自分の弟子にかける深い思いが元になって続いております。京風、賀風、江戸風の区別がありますが、技術的には違いは無く配色とデザインに違いがあるだけです。昔、女の子は日常のたしなみとして、半衿も自分で繍って楽しんだようです。